

<分担研究報告>

小児の発育発達に及ぼす地域・家庭の影響に 関する研究

分担研究者 高野 陽

古くから小児の健康度の指標として、その発育発達に関する評価結果が挙げられている。これは何れの時代においても変わることなく、それぞれの時代条件に適合した評価基準に基づいて実施されるべきであろう。さらに重要な点は、評価基準は多くの要因に基づいて作成されることが今日では非常に強調されるに至っている。特に、保健医療の急激な進歩発展が見られる現代においては、これまでの基準のみでは適切な小児保健活動や医療が不可能でさえあるような指摘もある。この見地より、当分担研究班においては、乳幼児から思春期に至る期間の小児の健全な成長を見守る必要性から、広く養育条件・環境条件に視点を置いた発育発達に関する適切な評価・指導が実施できることを期待し、今日の種々の実態に即応した発育発達評価の基準の作成に当たっている。

第2年次の研究は昨年度と同様に、4人の研究協力者の下で、

- (1) 乳幼児の発育発達の縦断的研究(窪田英夫・東京都がん検診センター副理事長)
- (2) 発育発達にみられる地域差に関する研究(東郷正美・東京大学教育学部教授)
- (3) 食行動からみた養育条件と発達に関する研究(八倉巻和子・大妻女子大学家政学部教授)
- (4) 乳幼児の発育発達に影響を及ぼす保育条件に関する研究(南部春生・聖母会天使病院小児科医長)

の研究が実施された。

今年度のそれぞれの研究の進捗は、ほぼ年度当初の計画に近いものであり、最終の目的であ

る小児の各時期の生活の場における健康管理の実践に有効な評価指標の作成に向けて、順調に進行しているものと考えられる。

この分担研究班の研究方針は、出生時から思春期に至る小児期の各時期の発育発達評価の適切な指標を得、さらにそれぞれの地域・家庭等の養育条件・環境条件に適応出来る保健指導のための指標を得ることにある。この目的に従うべき各研究協力者のもとで実施された研究成果の概略を述べることにしたい。

(1) 乳幼児の発育発達の縦断的研究

個々の乳幼児の発育発達状態の評価に当たっては、縦断的評価の重要性が広く指摘されている。今日使用されている乳幼児身体発育値は相当数の乳幼児を対象とした横断的資料の集計によって得られたものであり、縦断的観察によって得られた資料による「基準値」の作成の要望は強い。

この趣旨に添い、昨年度から、全国の医療機関において出生した新生児の14か月までの追跡調査を実施し、縦断的発育値作成に必要な条件の検討と個々の乳幼児の縦断的発育状態の解析を実施するとともに、個別に得られた資料を用いて、今回は約500例の出生時からの縦断的発育値の集計を行なった。その結果、昭和55年厚生省乳幼児身体発育値よりも、全般にやや小さい値をとっていることが判明したが、次年度に収集される乳幼児の計測結果を合わせた結果の検討や今回厚生省が実施した全国の乳幼児の発育調査結果との比較をする必要がある。

(2) 発育発達にみられる地域差に関する研究

発育発達に及ぼす地域差の検討をするために、学童・生徒の発育を指標として研究が実施され

ている。東京・群馬・栃木の小学校の児童を対象とした時系列解析を実施して検討がなされている。その結果、同一地域の中に住む児童の発育は必ずしも一致しているのではなく、個人差が大きいことが実証され、そのなかで地域差が発生することが確認された。

また、思春期の小児の発育の検討においては、学校保健の現場で適切に活用できる基準値の必要性が強調されている。そのためには、地域差の考慮が不可欠である。そこで地域差を考慮した資料の収集が出来るとともに、それに基づく基本的な研究が必要である。この目的に合わせて、思春期の小児の身長最大発育年齢の地域差の検討が研究されたが、これに関しては地域差が認めることが出来なかったため、これに基づき基準値の作成に当たることが出来ると確認された。

(3) 食行動からみた養育条件と発達に関する研究

食生活は、小児の発育に重要な影響をもたらす。しかし、小児の正しい食生活は、その養育者の小児の食事に関する認識の上に成り立っている。今回の研究においても、その点の確認は十分にされたが、特に、保育所保育と母親の食事の与え方の差が明確に乳幼児の食行動の形成に関与することを初めとして、養育条件の重要

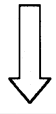
さが改めて確認された。このことは乳幼児の情緒発達に及ぼす影響等から、食事指導の指針づくりにおける一つの方向性を示唆したものである。

(4) 乳幼児の発育発達に影響を及ぼす保育条件に関する研究

女性の就労が多くなり、保育所保育の意義はますます大きい。この点を鑑み、保育条件の良否が乳幼児の心身の健康に及ぼす実態を把握し、そのよくない点の改善を図り、望ましい保育のあり方と乳幼児の健康との関連を検討することを目的に、発育発達状態を指標に研究を実施している。

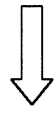
今年度は、家庭養育条件との関連を分析しており、病気にかかりやすい子の母・神経質な母・母子家庭の母などでは、子どもに問題が多いという結果が得られた。なお、発育発達状態については縦断的に調査が実施されている。

以上の如く、従来指摘されていたことは時代の条件を越えても重要条件として認識される必要がある。また、現在用いられている指標の十分な検討の必要があり、それを踏まえた上で適切な評価を行なうべきであることが確認できた。次年度の研究成果を望ましい保健指導に結びつけられるような指針策定に当たれるように努力し、今後の母子保健指導体制の確立に貢献したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



古くから小児の健康度の指標として、その発育発達に関する評価結果が挙げられている。これは何れの時代においても変わることなく、それぞれの時代条件に適合した評価基準に基づいて実施されるべきであろう。さらに重要な点は、評価基準は多くの要因に基づいて作成されることが今日では非常に強調されるに至っている。特に、保健医療の急激な進歩発展が見られる現代においては、これまでの基準のみでは適切な小児保健活動や医療が不可能でさえあるような指摘もある。この見地より、当分担研究班においては、乳幼児から思春期に至る期間の小児の健全な成長を見守る必要性から、広く養育条件・環境条件に視点を置いた発育発達に関する適切な評価・指導が実施できることを期待し、今日の種々の実態に即応した発育発達評価の基準の作成に当たっている。